



浮舟

第九号 平成29年12月28日

「浮舟」(うきふね)

◆原作ストーリー

宇治十帖「浮舟」の巻を典拠とする光源氏の息子・薫と孫の匂宮の寵愛を受ける浮舟。その姉は大君(おおいぎみ)で、薫の憧れの人であったが早世してしまいます。大君の死を受けて悲しみの淵に沈んでいた薫が偶然に出会ったのが、初瀬詣から帰る途中の浮舟です。薫は、大君に生きうつしである浮舟を宇治に連れていき隠し置くことにしました。薫のライバルである匂宮は対抗心を燃やし、浮舟に強烈な慕情を示します。当代きっての恋多き男、薫と匂宮。匂宮は薫になりますまして館を訪れ、契りを結んでしまいます。二人の愛を受け、どちらも選べず板ばさみに苦悩する浮舟は、我が身を嘆き、入水を決意しますが、未遂に終わります。「浮舟」という存在を捨て、出家する道を選んだ浮舟を死んだと思い、悔恨の念を持つ二人。やがて薫は浮舟が隠れ住む場所を偶然に見つけます。薫は浮舟の弟、小君を使者に再び縁を持とうとしますが、運命の波に翻弄され続けた女はその誘いを強く拒みます…。

## ◆宗家の語る見どころ

「浮舟」は「玉鬘」(第7号で紹介)に近い性格のお能で四番目物に分類されるものです。歌人の横尾元久が作詞し、世阿弥が作曲しています。作詞・作曲ができた世阿弥がなぜ曲だけを書いたのでしょうか。横尾元久はどのような人物だったのでしょうか。世阿弥は「お能を作詞するには、和歌が詠めないと書けない」と言っています。もちろん舞も知っていなければいけませんし、なんととっても『源氏物語』を読み込んでいなければ、この帖を題材とした曲はかけません。横尾元久に作曲を頼まれたのか、それとも世阿弥がこの詞に惚れて作曲をしたのか…、謎は尽きません。女性をシテとする歌舞を中心とした三番目物の形式をとりそうなこの曲は、後シテの舞が〈序之舞〉ではなく、物の怪にとり憑かれた妄執の舞〈カケリ〉を舞うのが特徴です。狂乱物というのは、離別した愛人への払っても払いきれない想いや我が子を失ったストーリーが多いのですが、ここでは二人の男に言い寄られて恋に悩んだ末、決断できずに物の怪にとり憑かれるという着想がユニークです。人みな寝たりしに妻戸を放ち出でたれば、風烈しう川浪荒う聞こえしに、知らぬ男の寄り来つつ、誘い行くと思ひしより、心も空になりはてて…夕顔は気が狂ったのでありません。二人の男性を同じ想いで愛してしまったその迷いが感情の高ぶりとなり〈カケリ〉として表現されます。最後には、小野にやってきた僧に回向してもらい、すっかり執心が晴れて天界へと生まれることができました、と消えていきます。しかし、浮舟の二人の男への永遠の想いは消し去ることができたのでしょうか。心も空になりはてて…浮舟の切ない声が聞こえてきそうです。

※三番目物…鬘物ともいう。女性をシテとして、歌舞中心の優美な場面を展開。幽玄の情緒がもつとも濃い。  
※四番目物…離別した愛人や我が子を求めてさまよう狂乱物や、現生への断ちがたい妄執をあらわす執心物など、文学的主題の濃厚なものが多い。

